

## 日本におけるマルサス受容と人口論の形成

## ～人口学の源流を探る～

## &lt;趣旨&gt;

1948年創立の日本人口学会は75年の歩みを重ね、昨年(2023年)6月の大会では記念座談会がおこなわれた。本学会創設時のメンバーや、『人口大事典』(平凡社、1957年)執筆者の顔触れを見ると、人口統計、経済学、社会学、医学、生物学など様々な分野の学者が参集したことがうかがえる。日本の人口学のそのようないくつかの源流の一つとして、マルサス人口論の受容とこれを咀嚼した上での(ある面で激しい論争の末に)「人口論」の形成(具体的には大学における「人口論」講義の始まり)があったことは疑いない。しかし、その流れ・いきさつは必ずしも明らかになっているとはいえないであろう。本シンポジウムでは、このような流れを振り返り、人口学の歩みとゆくえを考えるよすがとしたい。

## &lt;議論したいこと&gt;

- ①マルサス人口論は、いつ、どのように日本に伝来したのか?
- ②それを日本の学者たちはどのように受け入れ(あるいは批判し)たのか?
- ③当時において人口に関してどのような議論がおり、論争がなされたのか?  
いわゆる「昭和人口論争」。また社会政策論との関連はどうか。
- ④戦後、大学における「人口論」科目開設はどのような状況であったか?  
それは、①②③とどのような関りがあったか?  
南亮三郎(中央大学)と市原亮平(関西大学)に焦点を当てる。
- ⑤ここで議論した戦前・戦中・戦後(1960年頃まで)の一連の人口論の流れは、その後高度経済成長を経て現在に至るまでの人口論・政策論と、どのように接続する/接続しないのか。

## &lt;本シンポジウムの特色と意義&gt;

## (1) 人口学の一ジャンルとしての人口論史・学史・思想史の継承と復権

人口学会の年次大会が中央大学で開催されるのは1998年以来。この年はマルサス『人口の原理』初版(1798年)の200周年にあたり、これにちなんだシンポジウムが持たれた。この頃は、人口論史・学史・思想史は日本の人口学を構成する柱の一つをなしており、日本人口学会(編)『人口大事典』(2002年、培風館)は岡田實先生が編集委員長で、「第3部：人口思想と人口学説」が設けられた。しかし現在では、本学会の現職会員では、この分野の研究者はごく少数にすぎない。本セッションが、この方面の研究の継承と復権に微力ながら寄与できればと願う。

## (2) 思想史研究の意義：人口研究における「アイデアの伝播」という観点

思想史の研究は、決して懐古趣味ではなく、人口研究において普遍的な意義を持っている。それは新しい（ある人口から見れば外来の）アイデアが、いかに受容され（半面反発を受けながらも）伝播していくかという過程を研究することに他ならないからである。「アイデアの伝播」という観点は、人口変動を説明する上で重要な視点。例はいくらでも挙げることができる。

少子規範、家族計画などのアイデアの伝播→出生率低下

健康志向などのアイデアの伝播→死亡率低下

都市的ライフスタイルの伝播→出生率低下、死亡率低下

新しいアイデアが最初は社会の上層に受け入れられ、次第に下層に普及していくが上層は離れていく（上層は先に受容し先に離脱）ということも見られる（例：人工乳、喫煙、過カロリーの食事など）。このタイムラグは出生率や死亡率の階層格差の説明に用いることができる。

本シンポジウムのねらいは「マルサス人口論」という外来のアイデアが、日本にどのように受け入れられ、人口論の形成にどのように影響したのか、という過程を明らかにしようというものである。

## (3) 第一線の研究者による最高の陣容

このテーマでは、考えられる限り最高の第一線の研究者に結集していただいたと自負している。

## (4) 「高田保馬の人口論」に着目

このセッションでは多くの学者・論客を取り上げるが、中でも高田保馬にスポットライトを当てる。それは、一昨年（2022年）が高田没後50年にあたり、高田の再評価の動きがみられることを意識してのことであるが、それだけでなく高田が「第三史観」として「人口史観」を打ち出したことは、人口学者にとって宿願ともいえる大テーマ（人口システムと社会・経済システムの相互作用）について改めて考える機会になるのではと思うからである。

## (5) 日本の人口学の源流（ミッシング・リンク）を探して

日本人口学会（1948年創立）、人口学研究会（1958年創立）いずれも歴史は古いが、現在の私達からすると、創立前後のことはよくわかっていない。本セッションは日本の人口学の源流を探る一つの重要な探索になると考える。つまり、昭和初期には人口論が大変盛り上がっていたが、戦後の人口学会・人口学研究会の活動開始との間がいわばミッシング・リンクになっているように思える。本シンポジウムでは「マルサス人口論が日本の学者たちに波紋を投げ、様々な議論の末に、ひとまず戦後の〈人口論〉開講という形で収斂した。それが一つの基盤となって人口学が花開くことになった」というストーリーを描いてみたい。

もちろん今回取り上げる「マルサス伝来→人口論争→南・市原の「人口論」開講」以外にもいろいろな経路があることと思う。今回のセッションが呼び水として、日本の人口学の成り立ちに関する全体的な系図（俯瞰図）を描く大きな取り組みの一步になれば幸いである。

なお今回のセッションでは、戦時人口政策（人口政策確立要綱など）はあえて正面から取り上げない。それは別の機会に期待するとして、今回は経済学・社会学・人口学といった学問の成立過程に目を向ける。戦前の日本は社会科学の黎明期であり、欧米からの「輸入」によるが多かったと思われる。それが戦後にかけて（もはや舶来品ではない）日本独自の社会科学が確立していくわけであるが、その中で人口学はどのように成立したのかという点に関心をおきたい。

#### （６）「戦前・戦中・戦後」という時期

このセッションは、研究対象を「戦前・戦中・戦後（1960年頃まで）」という時期に限定する。この時期は、日本の人口転換が完了に向かう時期であり、人口増加（過剰人口）と「人口の質」の低さが問題とされていた。この後の時期（1970年代以降）とは一線を画すことができると思われる。高度経済成長を経て現在に至る、この後の時期（ポスト人口転換期）では、人口高齢化と少子化・人口減少が問題となっており、人口問題も様変わりしている。このような時期の限定は意味のあることだと思う。

さらに言えば、本セッションは（第一次・第二次世界大戦の）戦間期から戦直後の日本が「人口問題の時代」であった（人口論が展開し、人口学の礎が築かれた時期であった）と捉えるものであるが、同時代の欧米もまた同様の意味で「人口問題の時代」だったといえよう。日本で内閣に人口を主題とする最初の政府機関である人口食糧問題調査会が設置されたのは1927年、厚生省人口問題研究所の創立は1939年であるが、国際人口学会（IUSSP）の前身となったInternational Union for the Scientific Investigation of Population Problemsの創立は1928年、英国のPopulation Investigation Committeeの創立は1936年のことである。優生学や産児調節運動が絡んでいる点でも共通している。本セッションを一つのステップとし、次の段階では、同様のテーマで「国際版」に拡大したセッションも構想されるのではないか。

<おわりに>

ある意味で、日本の人口論の歴史は、マルサス伝来から戦後の「人口論」開講（南先生と市原先生）までを第1期、その後現在までを第2期と区分することもできるのではないだろうか。この第1期と第2期の節目にあたる日本最初の「人口論」講義がなされた中央大学でこのようなシンポジウムが持たれることは誠に意義深い。今回のシンポジウムは、この第1期（人口論成立の前史）に光を当てるものである。それは（これから盛んになることが期待される）第2期（戦後における人口学の発展史）の研究の基盤として必須のものといえよう。会員の皆様の積極的なご参加をお願いしたい。